

受身や自動詞とその周辺構文による結果の表現：日本語，韓国語，ロシア語，エストニア語を対象に

SOEJIMA, Kensaku / 副島, 健作

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication : Ibunka / 異文化

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

131

(発行年 / Year)

2023-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026265>

受身や自動詞とその周辺構文による結果の表現

——日本語，韓国語，ロシア語，エストニア語を対象に——

副島健作

SOEJIMA Kensaku

要旨

本研究では，人為的事態の結果の表現を構文間の連関も考慮に入れ，その使用傾向について多言語パラレルコーパスを用いて通言語的に考察し，日本語は自動詞文の使用が好まれるが，エストニア語は不定人称文，ロシア語や韓国語は受動文の使用が自然であること，その構文的特徴は事態把握の主観性・客観性が影響していることを明らかにした。

1. 序

本研究は，日本語，韓国語，ロシア語，エストニア語の人為的事態の結果の表現の比較対照を通して，それぞれの言語における各構文の対応関係を明らかにするとともに，異なる構文と事態把握との関連性を指摘し，人為的事態の結果を表す動作主非顕示の構文の言語における拡がりを考察することを目的とする。

数多くの言語現象に主観性が関与するのが日本語であり，池上（2000, 2003, 2004），中村（2004, 2009, 2016），本田（2005）などの先行研究でも言われているように，日本語は話者中心の言語，換言すれば主観性の傾向の強い言語である，というのは認知言語学では今では通説となっていると言えよう。しかしながら事態の主観的把握が如何にして構文選択に影響を与えるに至るかに関しては十分研究がなされているとは言えない。Soejima（2014），副島（2018a, 2018b）等には構文レベルの主観的把握，とくに動作主が明示されない構文の使用に見られる当該言語間の相違と事態の捉え方の違いの様相についての考察があるが，本論考では事態把握の主観性・客観性が構文選択にどんな影響を与えるに至るかに関して，主語の省略が比較的容易な主語脱落言語（null-subject language）に着目し，日本語から韓国語，ロシア語，エストニア語に翻訳されたパラレルコーパスから収集したデータを用いて，考察を行う。

以下，第2節で議論の前提（これまでの類型論研究における本論文の位置づけ）と通言語的に報告されている主観性（事態把握）について確認し，第3節で本稿の研究課題を示す。第4

節では、韓国語、ロシア語、エストニア語の文法的特徴と取り扱う構文について言語ごとに記述する。次ぐ、第5節で研究データとなるパラレルコーパスの概要とデータ抽出の方法を提示し、第6節では調査結果から明らかになった構文の分布状況を用いて、各言語の特徴を示す。最後に第7節で自動詞、受身、不定人称文を比較し、さらに各言語の構文使用の傾向と事態把握との関連を対照する。

2. 先行研究

2.1. 非対格自動詞、受身、不定人称文による結果相構文

変化の結果が持続していることを表す結果相 (resultative) と呼ばれる一群の言語現象について通言語的にプロトタイプの特徴づけをしている論考として Nedjalkov and Jaxontov (1988) がある。そこでは、他動詞をもとにした結果構文は、典型的にその他動詞の対象の状態を表すもので、その対象は通常結果構文の主語として現れ、またそれ故に動作主は削除されるという事実が幾つもの言語から提示されている。つまり、項構造の変更がアスペクト形式素によって引き起こされており、文法関係の決定とアスペクト解釈との連関を示す現象として興味深い。

以下の例 (1-3) はそれぞれ隠れた動作主が引き起こした結果を表す場面を表しているが、同一の事象でも、(1) は日韓露語 (以下、日、韓、露はそれぞれ日本語、韓国語、ロシア語の略) が受動文、(2) は日露語、エストニア語は非対格自動詞 (以下本稿では、とくに断らない限り「自動詞」を非対格自動詞の意味で用いる) による文、韓国語は受動文、(3) は日本語はシテアル構文、韓露語は受動文で示されている。一方、エストニア語には英語や日本語の (直接) 受動文に相当する構文が事実上存在せず (松村 1999: 163)、述語動詞がどの人称代名詞とも結びつかない「不定人称形」を取り、行為者や動作主を主語としてとりあげない「不定人称文」と呼ばれる構文で示される (1, 3)。それぞれの言語の受動文や不定人称形についての詳細は4章で後述する。(以下、韓国語の例のローマ字転記は Yale 式を用い、受動に関わる形態素は斜体で示す) ^[1]。

(1) (一誰がこの皿割ったの?—わかりません。私が見た時には、)

日: すでに皿が割られていました。

韓: imi cepsi-ka kkay-cye isse-sse-yo.

すでに 皿-NOM 割る-cita-ている-PAST-POL.DECL

露: Uže tarelk-a by-l-a razbi-t-a.

すでに 皿-F.SG.NOM BE-PAST-SG.F 割る.PFV-PPP-SG.F

エストニア: Taldrik oli purusta-tud.

皿.SG.NOM BE.PAST.3.SG. 割る-PP

(2) 日：電気がついています。

韓：pwul-i khye-cye iss-supni-ta.
電気が つける-cita-ている-POL-DECL

露：Svet gorit.
電気.M.SG.NOM つく.IPFV.PRS.3.SG

エストニア：Lamp pole-b.
電気.SG.NOM つく-PRS.3SG

(3) 日：カレンダーに予定が書いてあります。

韓：tallyek-ey yeyceng-i ssu-ye-cye iss-supni-ta.
カレンダー-に 予定-NOM 書く-i/hi/li/ki-cita-ている-POL-DECL

露：V kalendar-e napisa-n-y plan-y.
に カレンダー-M.SG.LOC 書く.PFV-PPP-PL 予定-PL.NOM

エストニア：Ajakava on kirjuta-tud kalendri-sse.
スケジュール.SG.NOM BE.PRS.3.SG 書く-PPP カレンダー-ILL

(日韓語の例は副島 (2018a: 177), 露語の例は副島 (2018b: 67))

このように、個別言語における動作主不定の人為的結果を表す構文としては、日本語は自動詞文、受動文が用いられ、日本語特有の表現としてシテアル構文も用いられる。韓国語も自動詞文と受動文が用いられるが、エストニア語に特徴的な不定人称文は存在しない。ロシア語についても同様に自動詞文、受動文が用いられるが、実はロシア語にも不定人称文が存在するので、動作主不定の人為的結果を表す可能性がある。エストニア語では自動詞文と不定人称文が用いられる。

一方、通言語的にみると、動作主不定の結果表現の構文には自動詞文 (A), 受動文 (B), 不定人称文 (C), シテアル構文 (D) など様々に表現されることがわかる。

(4) A. (自動詞文) 窓が開いている。

B. (受動文) Okn-o otkly-t-o.
窓-N.SG.NOM 開ける-PPP-N

C. (不定人称文) Aken on ava-tud. (エストニア)
窓.SG.NOM BE.PRS.3.SG 開ける-PPP

D. (シテアル) 窓が開けてある。

これらの構文は、個別言語内において場面によって使い分けられており、その使われ方も言語によって異なる。一方で、動作主がいることを暗示しながらも、事態の結果に着目し、動作主については言及できないか、あるいはしない「動作主の非焦点化」が必要な場面を表

現するという点では共通している。概念的には連続していると考えられるが、どのような関係にあるかはまだ明らかになっていない。

Nedjalkov and Jaxontov (1988) は、このようにアスペクト形式を伴う結果相構文となると動作主が取り除かれ、対象だけが現れ、動作主が非主題化された構文となるという事実を幾つもの言語から提示している。また、これまで通言語的に受身文のプロトタイプの特徴づけをしている論考として、Givón (1981), Shibatani (1985) があり、不定人称文については Malchukov and Ogawa (2011) がある。さらに、Croft (2001) は類型論的データに基づいて受身文の構文間の連続性を指摘し、構文間の連続性が概念的な連続性を示していると主張する。本稿では他動性の連続体としての結果相において自動詞も含め、事態把握の主観性・客観性と関連するかどうかの問題について検討する。

2.2. 事態把握と主観性

言語話者の事態把握の仕方と言語表現の関係について、日本語と英語は言語体系が異なる言語としてさまざまな角度から分析がなされてきた。池上 (1981) は日英語の表現構造を比較対照し、日本語は〈出来事全体〉を捉え、事態の〈成り行き〉という観点から表現しようとする「ナル」的言語であるが、英語は事態に関与する主体や行為を際立たせるような形で表現しようとする「スル」的言語であると述べている。また、中村 (2009: 371-372) は事態把握の主観性、すなわち内の視点による事態の捉えを「I (interactional) モード認知」、事態把握の客観性、すなわち外の視点による事態の捉えを「D (displaced) モード認知」と呼び、その状況把握の特徴を示す 23 の要素で日英語を比較し、日本語の主観的把握の程度が高いことを指摘した。その要素の 1 つに「非人称文」の有無があり、「非人称文」がある日本語は I モード的だとされた。一方で、自動詞文や受動文、シテアル構文については取り上げられていない。しかし、これらも主観性の判断基準となることが知られている。

千・柏原 (2006) は韓国語, 堀江・パルデシ (2009) は英・韓・中・マラーティ語, Soejima (2014) はロシア語について日本語とのパラレルコーパスを分析し、言語間の構文使用の分布状況の違い(受動か能動かなど)を量的に示した。その結果、受動文については言語によって選択の傾向が異なり、そこに視点の違いが影響していること、その中でも日本語は受動文を好んで使う言語であるということが確認された。また、副島 (2018a) は韓国語, 副島 (2018b) はロシア語と韓国語の両言語について日本語とのパラレルコーパスを用いて同様の分析を行い、結果の状態は受動文だけでなく、自動詞文など様々に表されることが浮き彫りになった。

堀江・パルデシ (2009), Soejima (2014) は、日本語が受動文を好んで使う言語であることを指摘し、そのことから「主観的把握」を好む言語であることが主張されたが、結果の状態を表す場合における構文選択の傾向を考察した副島 (2018a), 副島 (2018b) では、日本語は受動文よりもむしろ自動詞文を好んで使う言語であることが明らかになった。そこでは、受動文と自動詞文では自動詞文のほうが主観性が高いということも議論され、日本語が「主

観的把握」を好む言語であると結論づけられたが、当然ながら日韓露3言語だけではその特徴は相対的なものに過ぎず、一般化するには不十分である。禹 (2015: 74) は、韓国語と中国語の表現構造を比較し、韓国語は日本語寄りの「ナル」的表現への傾向が強く、中国語は英語寄りの「スル」的表現への傾向が強いと結論づけた。また、前述したとおり、中村 (2009) は23の要素の1つに「非人称文」をあげているが、日英語の比較を行ったにすぎず、「不定人称文」が存在するロシア語やエストニア語についての考察は十分にされてきているとは言えない。さらに (4) であげた自動詞文 (A)、受動文 (B)、不定人称文 (C)、シテアル構文 (D) の指標のうち、どの構文の使用傾向が主観的把握の度合いの高さにより影響を与えるのかもはっきりしない。

今までは言語の事態把握の主観性・客観性は、言語現象ごとや構文ごとにその使用傾向を指摘することで判断できると考えられてきた。しかし、実は当該の言語現象や構文のいくつかには連続性があると考えられる。前述したとおり、自動詞文、受動文、不定人称文、シテアル構文も「動作主の非焦点化」を表現するという点では共通しており、概念的には連続している可能性がある。また、当然ながら主観的・客観的というのは単純な2分類ではなく、中間的なものも存在する。もしそうだとすれば、構文間の連関も考慮に入れ、その使用傾向を通言語的に考察するというやり方で、事態把握の主観性・客観性が構文選択にどんな影響を与えるに至るかという問題の一端が解決できると思われる。

3. 研究課題

以上をふまえ本稿では、日本語、韓国語、ロシア語、エストニア語の4言語において、人為的事態の結果を表す場合の自動詞文、受動文、不定人称文、シテアル構文の使用傾向を明らかにすることを目的とする。そのため以下の2点の課題について検討する。なお、以下本稿では、「自動詞」を意味上の対象 (Patient) が主語として現れる非対格自動詞の意味で用いる (「歩く」「飛ぶ」のような主語になるものが動作主 (Agent) である非能格自動詞は考察の対象としない)。

(5) 研究課題

動作主が不定の人為的事態を表す場合、

- ①結果状態の表現選択の傾向は言語間でどのように違うのか
- ②自動詞文、受動文、不定人称文、シテアル構文はそれぞれどんな事態把握を反映しているか

具体的には、日本語の受動文、自動詞文、シテアル構文を取り上げ、動作主不明の結果状態を主語脱落言語はどのように表現するかを考察する。取り上げる言語は、日本語と同じ主題優勢言語 (topic-prominent language) で、形態的類型や基本語順においても近縁の関係に

ある韓国語、主語優勢言語 (subject-prominent language) としては、語の機能を表す要素が後接される膠着語の特徴が強い点で日本語と似ており、不定人称文を有するエストニア語^[2]と、日本語とは異なり、屈折語で SVO 型のロシア語とをパラレル・コーパスにより比較する。非主語脱落言語 (non-null-subject language) である英語については取り上げないが、英語はこれまでの多くの研究で日本語と比較対照され、対極的に客観把握の度合いが高いとされており、韓国語、エストニア語、ロシア語は日英語の中間に位置すると思われる。これら 3 言語の状況把握の特徴について明らかにし、同じ事象の描写においてどのような言い方が自然か、その背景に何があるか考察する。

4. 受動文と不定人称文

ここでは、韓国語、ロシア語、エストニア語の文法的特徴について、主に本稿の議論に関わるものを簡単に述べる。その後、取り扱う構文について言語ごとに示す。

4.1. 対象とする言語の特徴

まず、「格」であるが、いずれの言語も機能的に日本語の格助詞に当たる接尾辞によって標示される。そのため、文中の語順を比較的柔軟に入れ替えることができる。

次に「一致」であるが、ロシア語もエストニア語も名詞とそれを修飾する形容詞との間に数と格、名詞句とそれを主語とする動詞との間に人称と数の一致が見られる。ロシア語は性に関しても、形容詞が修飾する名詞と一致し、また、動詞述語が過去形の場合、主語の人称と関係がなくなり、性と一致する。一方、韓国語や日本語には一致は見られない。

いずれの言語においても、文脈上明らかである場合、とくに日常会話では主語が省略される。文中における名詞の意味的・統語的關係が格標示によってはっきり示され、さらにロシア語とエストニア語は一致によって主語が容易に推測されるからである。ただし、後述するロシア語やエストニア語の不定人称文は、動詞の形に呼応する主語が存在しないことを特徴とする構文で、主語が省略された文ではない。

4.2. 受動文

本稿では、言語によって形式が異なる受身文を比較するにあたり、これまで通言語的に受身文のプロトタイプの特徴づけをしている論考である Shibatani (1985) と Givón (1981) のプロトタイプの条件を基準にした。Shibatani (1985) は意味的特性、統語的特性、形態論的特性から典型的な受身文を定義し、主要な語用論的機能は、話し手や聞き手の関心が動作主から被動作主、または事象そのものに向けられること、つまり「動作主の非焦点化」にあるとした。また、Givón (1981) は受身文の主な機能領域として「被動作主の話題化」、「動作主の非焦点化」、「動詞の状態化 (脱他動化)」の 3 つを提案している。これらの条件を満たす構文を典型的な受身文と判断し、そこから逸脱するものは非典型的な受身文と見なした。

4.2.1. 韓国語

韓国語は動作主が意図的に行った行為を事態の実現や結果に着目し、動作主を背景化して示す場合、主に受動の表現を用いる。韓国語の受身の作り方はいくつかあることが指摘されているが、おおむね次の3つに大別される（「接辞形」、「cita 形」の用語は生越（2008）による）。

(i) 接辞形—被動の意味を表す接辞 /i/, /hi/, /li/, /ki/ の接続による^[3]

- (6) pemin-i kyengchal-eykey pwutcap-hye-ss-ta.
 犯人-NOM 警察-に 捕まえる-i/hi/li/ki-PAST-DECL
 「犯人は警察に捕まえられた」

(ii) cita 形—被動の意味を表す語尾 /cita/ の接続による

- (7) hankul-un seycongdaywang-ey uyhayse mantule-cye-ss-ta.
 ハングル-TOP 世宗大王-に よって 作る-cita-PAST-DECL
 「ハングルは世宗大王によって作られた」

(iii) hata 動詞^[3]の語尾を /toyta/, /tanghata/, /patta/ に変える

- (8) wuli-nun ipen tayhuy-eyse laipel tim-ey
 私たち-TOP 今回の 大会-で ライバル チーム-に
 wusung-tangbay-ss-ta^[4]
 優勝する-tanghata-PAST-DECL
 「私たちは今回の大会でライバルチームに優勝された」

（許（1999: 117-118）を一部修正）

接辞形と cita 形の違いについては、生越（2008）が「破れる / 破られる」を意味する ccic-ki-ta（接辞形）と ccice-ci-ta（cita 形）の使い分けについて実例をもとに分析し、接辞形は主語である変化物と動作主の関係を前提とした受動的な意味を持ち、cita 形は明確な動作主の存在を前提とせず変化自体を表す、いわゆる非対格自動詞のような意味を表す傾向にあるとしている。

4.2.2. ロシア語

ロシア語の動詞は完了体・不完了体の二つのアスペクトがある。その大まかな意味は、例えば過去形であれば、完了体はその動作が既に終了したもの、すなわち点の動作を、そして不完了体はまだ続いているもの、すなわち線の動作を表す。ロシア語の受動文は動詞アスペクトによって2種類の表現形式をもつ。

完了体動詞は受動の過去分詞を形成（被動形動詞過去短語尾（-n/-t）により形成）し、「コピュラ＋分詞」形によって表現される（9）。一方、不完了体動詞の場合は再帰動詞（接尾辞 -sja をつける）によって受動が表現される（10）。林田（2013: 75）に倣い、本稿では前者を「分

詞形」, 後者を「再帰形」と呼ぶ。動作主は具格(造格)となるが, 必須補語ではない。

- (9) Dom *by-l* *postro-en*
 家.M.SG. NOM BE-PAST.SG.M 建てる.PFV-PPP.SG.M
 plotnik-om.
 大工-M.SG.INS
 「家は大工によって建て上げられた」
- (10) Dom *stoi-l-sja* plotnik-om.
 家.M.SG.NOM 建てる.IPFV-PAST.SG.M-RFL 大工-M.SG.INS
 「家は大工によって建てられていた」

4.3. 不定人称文

不定人称文については Malchukov and Ogawa (2011) が, 機能を基準に, ある構造における主語が [1] 指示的な項でない, [2] 不定である, [3] 話題性をもたない, [4] 無生物である, [5] 動作主性(意思性)をもたないという 5 つのうちいずれかの特徴をもつ場合に主語典型から逸脱しているとみなし, このような逸脱が見られる構造を非人称構文 (impersonal form) としている。本稿では, 機能的にこれらの条件のいくつかを満たし, 形式的には動詞と一致する文法項としての統語上の主語を持たない構文を典型的な不定人称文と見なした。

4.3.1. エストニア語

エストニア語には, 述語動詞がどの人称代名詞とも結びつかない「不定人称形」というのがあり, 行為者や動作主を主語としてとりあげない不定人称文を形成する。受動文に相当する構文が事実上存在しないため, 不定人称文がその機能を担う(松村 1999: 163)。

現在や過去は, 動詞の不定人称形によって表される (11)。一方, 現在完了や過去完了は受動の過去分詞を形成 (tud- 分詞形(語尾-tud ~ -dud により形成)) し, 「コピュラ (3 人称単数形) + 分詞」形によって表現される (12)。松村 (1999: 163) に倣い, 本稿では前者を「単純形」, 後者を「複合形」と呼ぶ。

- (11) Põlevkivi avasta-ti möödu-nud sajand-il.
 オイルシェール.SG.NOM 発見する-PAST.INDF 過ぎる-PAP 世紀-PL.ADE
 「オイルシェールは前世紀に発見されました。」
- (12) Kas see sild on enne sõda ehita-tud?
 INTER この 橋.SG.NOM BE.PRS.3.SG 前に 戦争.PTV 建てる-PPP
 「この橋は戦前に建てられたのですか。」

(松村 1999: 169-170)

エストニア語には対格がなく、定人称文の（直接）目的語の格表示は主格、属格、分格が担う。属格目的語であった場合は、不定人称文では主格で現れるため、あたかも主語をもつ受動文のような姿になる。(13a)は定人称文、(13b)は不定人称文の例である。分格目的語や主格目的語（複数主格）の場合は定人称文と変わらない（松村 1999: 162）。

- (13) a. Osta-n selle sõnaraamatu kindlasti.
 買う-PRS.1.SG. この.GEN 辞書-SG.GEN きっと
 「わたしは、この辞書をきっと買います。」
- b. See sõnaraamat ostet-akse kindlasti.
 この.NOM 辞書-SG.NOM 買う-PRS.INDF きっと
 「この辞書は、きっと買われます。」

（松村 1999: 162）

また、複合形も「コピュラ+受動の過去分詞形」で表され、形式的に英語やロシア語などの受動構文と近似しており、機能的にも「受動」である。以上のことから、不定人称文と受動文との違いについては度々問題になる（Brevins 2001: 6-7, Reeli 2007: 179-180）が、非能格性の自動詞文からも作られる点が一般的な受動文には見られない特徴である（(14) のエストニア語の例の「 」内は著者による直訳）。

- (14) Tulla-kse ja minn-akse.
 来る-PRES.INDF そして 行く-PRES.INDF
 「行ったり来たりする」

（Tuldava 1994: 273）

4.3.2. ロシア語

次の例 (15) はロシア語で初対面の人同士で普通になされる「お名前は?」—「セルゲイと申します」という一連のやりとりである。（以下の (15)–(17) のロシア語の例の「 」内は著者による直訳）

- (15) — Kak vas zovut?
 どう 2.PL.ACC 呼ぶ.IPFV.PRS.3.PL
 「あなたをどう呼んでいますか?」
- Menja zovut Sergej.
 1.SG.ACC 呼ぶ.IPFV.PRS.3.PL セルゲイ.NOM
 「私をセルゲイと呼んでいます」

(山田 (2003: 5-6) より, 一部変更の上引用)

このようにロシア語では, 動作主が不特定の人為的行為を表す場合, 行為のみに着目し動作主を明示しない「不定人称文 (neopredelennno-ličnoe predloženie)」と呼ばれる構文がある。この場合, 通常対象を意味する名詞句は対格を表しつつ, 動詞に先行し, 動詞は 3 人称複数現在または未来, 複数過去の形をとる (Vinogradov 1960)。

- (16) Vinovn-ogo *prosti-l-i.*
 罪人-M.SG.ACC 許す.PFV-PAST-PL
 「罪人を許した」
- (17) Klub *zakro-jut.*
 クラブ.M.SG.ACC 閉鎖する.PFV-FUT.3.PL
 「クラブを閉鎖する」

(城田 2003: 24)

(16) のように過去時制では人称の区別がなされない。また, 複数形だからといって主体が複数とも限らない。1 人の経営者がクラブを閉鎖した場合でも (17) のように言うことができる。

これらの例はともに動作主には着目せずに「何が起こったか」を表しており, 日本語なら「罪人は許された」, 「クラブは閉鎖される」と受動文で言うのが自然である。

5. 研究データ

データ収集は, 同じ内容が韓国語, ロシア語, エストニア語で翻訳されたパラレルコーパスを使用した。パラレルコーパスはロシア語以外は著者がデジタル化したものである。日本の小説 1 編, 村上春樹著『ノルウェイの森』とその韓国語翻訳本, ロシア語翻訳本 (Web 版), エストニア語翻訳本の計 4 編を使用した。これを選んだのは, 有名な作品であり, 韓国語, ロシア語, エストニア語の翻訳が市販または公開されていて, テキストが公に認められたものであることと, 情景の描写が多く, 分析の対象とする結果状態の場面が多く描かれているからである。

日本語版においてシテイル (受動文のシテイルも含む) とシテアルの文を同定した。こうして抽出したシテイルとシテアルの例を 1 つ 1 つ丁寧に観察し, 動作手の明示がないという形態的特徴と, 人為的事態の結果を表しているという意味的特徴を基準に, 動作主が不定の人為的事態の結果を表している場面だけを取り出した。それに対応する韓国語, ロシア語, エストニア語の文と共に分析の資料とした。

個別言語を観察するに当たって, 何を自動詞と呼び, 何を他動詞と呼ぶかにはいくつかの

分類法が考えられるが、本稿では、エストニア語の自他動詞をそれぞれ以下のように定義する。

- (18) a. 他動詞：主格で表示される動作主と、（直接）目的語の格（主格、属格、分格）で表示される対象を項としてとる動詞
b. 自動詞：主格で表示される項を 1 つだけとり、それと呼応一致関係にある動詞

6. 構文の分布状況

6.1. 結果

ここでは、動作主が不定の人為的事態の結果を表す場面において、受動文、シテアル、不定人称文、自動詞文、その他の表現（いわゆる意識も含む）の使用の分布状況を示す。なお、以下本稿で提示する韓国語の分析データおよび例文の 1 部は、副島(2018a)および副島(2018b)のものと同一である。同様にロシア語の分析データおよび例文の 1 部は副島(2018b)のものと同一である^[5]。

表 1. 人為的事態の結果を表す場面における構文の分布状況（下段は %）

自他	他動詞			自動詞	その他	計
構文	受動形	シテアル	不定人称文			
日本語	34	48	0	128	0	210
	16%	23%	0%	61%	0%	100%
韓国語	78	0	0	54	78	210
	37%	0%	0%	26%	37%	100%
エストニア語	0	0	56	72	82	210
	0%	0%	27%	34%	39%	100%
ロシア語	59	0	6	59	86	210
	28%	0%	3%	28%	41%	100%

表 1 に示されているとおり、日本語は自動詞文の使用が 61% で、シテアルや受動文は少なかった。それに対して、韓国語は受動文とその他がそれぞれ 37%、自動詞文が 26%。エストニア語は自動詞文が 34% でその他が 39%、不定人称文が 27%、ロシア語では自動詞文が 28% で、受動文も 28%、その他が 41% という結果であった。つまり受動文は韓国語、自動詞文はエストニア語で比較的使用が多いということが分かった。

6.2. 分析

6.2.1. (状態) 受動文

表 2 は、日本語では受動文で表現された全 34 場面において韓国語、エストニア語、ロシ

ア語ではどのような構文が選択されたかを示している。受動文は、韓国語では 56%, ロシア語では 44% と韓国語のほうが多く、エストニア語の不定人称文は 65% だった。自動詞文はロシア語とエストニア語が 6 場面、韓国語 5 場面とほぼ同程度であった。

(19) では韓国語とロシア語で受動文が使われ、エストニア語では不定人称文が使われている（以下、エはエストニア語の略）。ここで使われている受動文は、行為そのものよりも目の前の状態を主体に着目せずに描写する「動作主の非焦点化（Givón 1981）」機能の受動文、すなわち、「降格受動文（益岡 1987,1991）」である。つまり、対象の状態を自然にそうなったものとして捉えて描写していることから、能動文より自動詞文に近い「なる」表現、主観的な表現と言える。

表 2. 日本語の受動文に対応する韓国語, エストニア語, ロシア語の表現の分布状況（下段は %）

	受動文	不定人称文	自動詞	その他	計
韓国語	19	0	5	10	34
	56%	0%	15%	29%	100%
エストニア語	0	22	6	6	34
	0%	65%	18%	18%	100%
ロシア語	15	2	6	11	34
	44%	6%	18%	32%	100%

(19) …, どの窓もカーテンが引かれていた。

韓：…, hanakath-i chang-ey-nun khethun-i
 一様に-AD 窓-に-TOP カーテン-NOM
 tuliwe-cye-ss-ta.
 引く-cita-PAST-DECL

露：…, i na vecx okn-ax by-l-i
 そして に 全部.PL.LOC 窓-PL.LOC BE-PAST-PL
 zadernu-t-y štor-y
 引く.PFV-PPP.PL カーテン-PL.NOM

エ：Kõiki-del aken-del olid
 すべて-PL.ADE 窓-PL.ADE BE.PAST.3.PL
 kardina-d ette tõmma-tud.
 カーテン-PL.NOM 前へ 引く-PPP

3つの言語の中でエストニア語の不定人称文が日本語の受動文に最も多く対応しており、この構文が受動文の機能を担っていることがわかる。

6.2.2. シテアル

日本語ではシテアルによって表現された場面は 48 あった。韓国語とロシア語はそれぞれ 38%, 42% が受動文で表された。また、エストニア語はそれを上回る 52% が不定人称文で表された (表 3)。(20) では韓国語は受動文, エストニア語では不定人称文が使われている。(21) はロシア語の受動文の例である。

表 3. 日本語のシテアルに対応する韓国語, エストニア語, ロシア語の表現の分布状況 (下段は %)

	受動文	不定人称文	自動詞	その他	計
韓国語	18	0	8	22	48
	38%	0%	17%	46%	100%
エストニア語	0	25	10	13	48
	0%	52%	21%	27%	100%
ロシア語	20	0	11	17	48
	42%	0%	23%	35%	100%

(20) …, 白いコートが椅子の背にかけてあった。

韓: …, hayan kotu-ga uyca dung-ey kel-*hye*-ss-ta.
 白い コート-NOM 椅子 背-に かける-i/hi/li/ki-PAST-DECL
 エ: …, valge mantel oli
 白い-SG.NOM コート-SG.NOM BE.PAST.3.SG
 tooli seljatoe-le riputa-tud.
 椅子.SG.GEN 背もたれ-SG.ALL かける-PPP

(21) 「それ洗ってあるから食べられるわよ」

露: On my-t-yj, mož-eš'
 3.M.SG.NOM 洗う-PPP-3.M.SG できる IPFV-PRES.2.SG
 prjamo tak es-t'.
 すぐ そうやって 食べる.IPFV-INF

日本語の全場面におけるシテアル構文の使用は 20% であった。シテアルはこれまで多くの研究者が指摘しているとおり, 対象に着目して結果の状態 (または動作の実現) を意味する表現である (益岡 1987, 原沢 2005, 副島 2007 など)。動作主の明示がないとはいえ, その含意を強調する点では, 出来事を自然作用として提示する自動詞文と異なる。自動表現は「周りの状況全体が変化した」ととらえる「ナル表現」(池上・守屋 2009: 119) と考えられている。

3つの言語の中でエストニア語の不定人称文が日本語の受動文に最も多く対応しており,

不定人称文とシテアル構文との機能的類似性を示唆している。

6.2.3. 自動詞文

表 4 は、日本語で自動詞文が用いられた全 153 場面のうち、それぞれの言語でどのような構文で表現されているかを示したものである。韓国語とロシア語ではそれぞれ 32% と 34%、エストニア語では 44% が自動詞文であった。

池上 (2011: 318) は、日本語話者は「話者が言語化しようとする事態の中に身を置き、当事者として体験的に事態把握をする」ことを好む、すなわち、「実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者はあたかもそこに臨場する当事者であるかのように、体系的に把握をする」という「主観的把握」を特に好むとし、心理的述語・指示詞・移動動詞などを日本語の「主観性」が現れる指標として挙げている (Ikegami 2005)。「何が起こったか」「どうなったか」といった描写を好むのは、外界の事態を話し手の視点からとらえるからであり、仮に人為的な事態であっても、事態の中に身をおいて自然にそうなったと捉え、表現する日本語の自動表現も、主観的な表現である。

表 4. 日本語の自動詞に対応する韓国語, エストニア語, ロシア語の表現の分布状況 (下段は %)

	受動文	不定人称文	自動詞	その他	計
韓国語	41	0	41	46	128
	32%	0%	32%	36%	100%
エストニア語	0	9	56	63	128
	0%	7%	44%	49%	100%
ロシア語	25	4	44	55	128
	20%	3%	34%	43%	100%

(22) 蜚はインスタント・コーヒーの瓶に入っていた。

韓: Kuke-n insuthenthukhephi byeong-ey
 それ-TOP インスタントコーヒー 瓶-に
 tul-e isse-ss-ta.
 入る-ている-PAST-DECL

露: Svetliačok side-l v bank-e
 蜚.M.SG.NOM 座る.IPFV-PAST.SG.M に 瓶-F.SG.LOC
 iz-pod rastvorim-ogo kofe.
 の インスタント-SG.N.GEN コーヒー.N.SG.GEN

(23) 四月四日の午後に通の手紙が郵便受けに入っていたが、…

エ: Neljanda aprilli pärastlounal maandu-s mu
 4 日.GEN 4 月.GEN 午後.ADE 着く-3.SG.PAST 1.SG.GEN

postkasti-s üks kiri, …
郵便受け-INE 一つ 手紙.SG.NOM

(22), (23) は韓国語, ロシア語, エストニア語において自動詞文が使われた例である。ここでも, 3 つの言語の中でエストニア語が日本語の自動詞文に最も多く対応している。

これまで, 日本語で受動文, シテアル構文, 自動詞文といった構文を使う場面で, 各言語ではどのような表現が使われるか, 構文ごとの分布状況を見てきた。動作主が不特定の意図的に行われる動作を表す場合, 1) 韓国語もロシア語も受動文や自動詞文を用いる, エストニア語は不定人称文や自動詞文を用いる, 2) エストニア語は不定人称文が受動文に対応するものと考えた場合, いずれの構文においてもその分布状況が日本語に一番近い, ということがわかった。

6.2.4. 「その他」の表現

ここで言う「その他」の表現というのは, 日本語の受動文, シテアル, 自動詞文で表された場面において, 韓国語, エストニア語, ロシア語では受動文や不定人称文, 自動詞文以外の構文が使用された例のことを指す。表 5 はそれぞれの言語で「その他」に分類した場面における構文使用の分布を示したものであるが, 全 210 場面における使用率は, 存在文は韓国語 30 場面, 14%, エストニア語 40 場面, 19%, ロシア語 36 場面, 17% で, どの言語においても一定数は見られた。一方, 他動詞能動文は韓国語 27 場面, 13%, エストニア語 2 場面, 1%, ロシア語 16 場面, 8% で, 韓国語とロシア語では多少使われるが, エストニア語ではほとんど見られないという結果であった。

表 5. 韓国語, エストニア語, ロシア語の「その他」の表現の分布状況 (下段は %)

	能動文		その他	計
	他動詞	存在動詞		
韓国語	27	30	21	78
	31%	38%	31%	100%
エストニア語	2	40	40	82
	2%	49%	49%	100%
ロシア語	16	36	34	86
	19%	42%	40%	100%

韓国語, ロシア語, エストニア語において, 他動詞をそのまま用いたり (24), (25), 目の前に対象が存在することだけを示す存在文で表した例 (26), (27) を以下に示す。

- (24) 「それ
- 洗ってある
- から食べられるわよ」

韓: “ike ssi-un kenikka mek-eto tway.”
 これ 洗う-RT ものだから 食べる-ても いい

- (25) だってあなたに会えないのはやはり淋しいもの、と緑の手紙には書いてあった。

エ: Lóppude lópuks olen ka mina
 終わり.PL.GEN 終わりに BE.PRES.1.SG また 1.SG.NOM
 Väga kurb, kui me ei kohtu,
 非常に 淋しい SG.NOM もし 1.PL.NOM NEG 会う
 kirjuta-s ta.
 書く-3.SG.PAST3. SG.NOM
 露: V pis'm-e ona pisa-l-a, čto . . . ,
 に 手紙-N.SG.LOC 3.F.SG.NOM 書く.IPFV-PAST-SG.F REL
 poskol'ku, ne vstreča-ja-s' so mnoj,
 だって NEG 会う.IPFV-AP-RFL と 1.SG.INS
 ona čuvstvu-et sebja odinoko.
 3.F.SG.NOM 感じる.IPFV-3.SG.PRES 自分.ACC 一人に

- (26) 「冷蔵庫にビールが
- 入ってる
- から、そこに座って飲んでてくれる？」

韓: “nayngcangko-ey maykcwu iss-unikka
 冷蔵庫-に ビール ある-か
 keki anca-se masi-ko iss-ullay? ”
 そこに 座る-して 飲む-ている-しよう

- (27) テーブルの上には小さな白い灰皿と新聞と醤油さしがのっていた。

エ: Laua-l olid väike valge
 テーブル -SG.ADE BE.PAST.3.PL 小さい.SG.NOM 白い.SG.NOM
 tuhatoos, ajaleht ja sojakastekann.
 灰皿.SG.NOM 新聞.SG.NOM そして 醤油差し.SG.NOM
 露: Na stol-e by-l-a malen'k-aja
 に テーブル-M.SG.LOC BE-PAST-SG.F 小さい-SG.F.NOM
 pepel'nic-a, gazet-y, butylk-a
 灰皿-F.SG.NOM 新聞-PL.NOM 瓶-F.SG.NOM
 soev-ogo sous-a.
 大豆-SG.M.GEN ソース-M.SG.GEN

6.3. 受動文 / 不定人称文選択の特徴

ここでは、各言語でどんな場面において受動文または不定人称文が選択されたかを見てい

くことにする。表 6 は、各言語において受動文または不定人称文が使われた動詞の一覧である（複数回使用されたもののみ）。

表 6. 韓国語、ロシア語の受動文、エストニア語の不定人称文で表された動詞の分布状況

（カッコ内は出現数）

韓国語	エストニア語	ロシア語
書く (9)	書く (7)	書く (10)
つく (8)	置く (4)	つく (6)
置く (5)	貼る (4)	はさむ (3)
かかる (5)	つく (2)	仕切る (2)
開く (2)	入る (2)	貼る (2)
乗る (2)	手入れする (2)	開く (2)
残る (2)	かける／かかる (2)	閉まる (2)
		建つ (2)
		手入れする (2)

「書く」や「つく」といった対象そのものの出現や変化を表す動詞はどの言語にも受動文が多く見られた。韓国語の受動文は、「置く」や「かかる」といった対象の位置変化を表す動詞に多く見られ、一方、ロシア語の受動文は「はさむ」や「貼る」のような動作主が直接対象に働きかけを行わないと実現しない、比較的他動性の高い行為の結果を表す場合に受動文が多く見られた。エストニア語の不定人称文は「書く」が最も多かったが、「置く」や「貼る」にも多く見られた。韓国語とロシア語の受動文使用は動詞の他動性の度合いと関連があることが示唆される。

6.4. パラレルコーパスに見られる受動や自動詞とその周辺構文の選択

以上のパラレルコーパス分析により、動作主が不特定の意図的に行われる動作を描写する場合の、日本語、韓国語、エストニア語、ロシア語の特徴は次のようにまとめられる。

1. 日本語も韓国語もロシア語も受動文や自動詞文を用いる。
2. エストニア語は、受動文の代わりに不定人称文を用い、自動詞文も日本語に次いで多く用いる。
3. 韓国語もエストニア語もロシア語も存在構文を用いる。
4. 韓国語やロシア語は他動詞の能動文を用いることもある。
5. 受動表現になりやすい動詞があり、言語によって傾向が異なる。

7. それぞれの構文の特徴

本研究で述べてきた「動作主の非焦点化」機能を表す構文、自動詞文、受動文、不定人称

文と他動詞の能動文との違いを示したものが表 7 である。

視点とは話者が何に注目して表現しているかということである。「視点」という用語は近年様々な立場からそれぞれ異なる意味で用いられてきたが、古賀（2018）では日本語の文法説明に用いられてきた「視点」の意味が 5 つの要素に整理され、その概念が網羅的に扱われている。本研究で主張する「視点」という概念は、古賀（2018）の言い方では、「見られる客体：どこを見るのか（注視点）」という意味に近いが、「見える範囲：どこからどこまでが見えるのか（視野）」という要素の関与も含めたものである。

表 7. 「動作主の非焦点化」機能の構文間の比較

	自動詞文	(状態) 受動文	不定人称文	能動文
構造的特徴	S= 対象	S= 対象	S= なし	S= 動作主
	O= なし	O= なし	O= 対象	O= 対象
動作主の明示	不可	(基本的に) 非明示	不可	明示
意味	対象の結果の 状態	対象の結果の 状態	対象への 働きかけ	対象への 働きかけ
視点	対象	対象	(動作主と) 対象	動作主と対象

自動詞文は、眼前の状態を対象の周りで引き起こされた事態の結果として描写する。つまり、言語主体は眼前の状態を対象とほぼ同じ目線、あるいは対象にかなり近づいたところで眺め、目の前で起こったことの結果として捉え、表現する。そのため、動作主は眼中になく、当然描写できない。状態受動の受動文は対象の状態を表し、対象に着目して表現する。その対極にある能動文は動作主が対象に何をしたかに着目している。一方不定人称文も動作主が対象に何をしたかを表現するが、動作主が誰かには関心がないため、対象に着目する受動文と動作主と対象に着目する能動文の間に位置づけられる。これら自動詞文、受動文、不定人称文、能動文は対象が主語であるか目的語であるか、動作主が明示可能か否かで特徴づけることができる。図示すると図 1 のようになる。

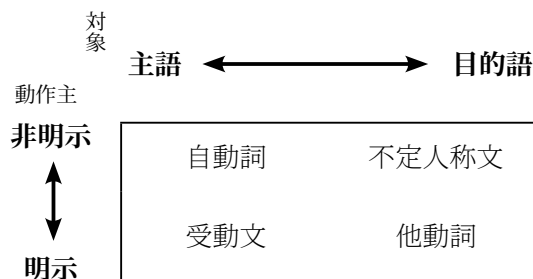


図 1. 「動作主の非焦点化」機能の構文間の相関

他動詞が表す人為的行為の一部始終を表現するには、動作主、対象、行為のすべてが見えなければならない。そのため話し手は行為に対して距離を置き、中立的な位置から動作主を中心に明示し、出来事を描写する。これが能動文である。

同じ行為でも、話し手が動作主よりも対象のほうに関心があり、より近くで見ようとする場合、動作主のことがぼんやりとしか目に入らない。動作主がいることは間違いなくわかっているが、それが誰かはわからないので、表現せず、対象と行為だけを描写する。これが不定人称文である。表面上、真の動作主は存在しないが、何らかの動作主の存在が認識されている。

話し手が、さらに対象へ近づけば近づくほど、動作主の存在は見えにくくなる。こうして、受動文や自動詞文は、対象を中心に据え、何が起こったか、その結果どうなっているか、という動作や状態として描写する。

つまり、話し手と行為、話し手と対象との（心理的）距離の度合いがこれらの構文の使用を動機づけていると考えられる。話し手が対象に近づき、対象の側から行為を切り取って見るという「視点」の移動を「主観性」と呼ぶなら、自動詞文は主観性が高く、能動文は客観性が高い表現であると言える。その中間に位置するのが受動文や不定人称文である。

自動詞文は、動作主がはじめからなく、行為が自然に発生したかのように事態を捉えるので、動作主を明示しない。つまり、事態把握としては「自然発生的」である。

それに対し、本稿で問題にしてきた「動作主の非焦点化」機能の受動文は、話し手が動作主よりも対象に共感を寄せ、対象の立場から事態を叙述するための構文であり、主語は対象となる。眼前の状態に着目しているだけなので、事態の引き起こし手を脇役として登場させることもあるが、通常は現れない。つまり、事態把握としては「対象の話題化」である。

また、不定人称文は、動作主を背景化し、何が起きたかという事態の実現を前景化して叙述するための構文であり、構造形式としては他動詞構文の主語である動作主が構造上削除され、対象は本来の位置に留まっている。つまり、事態把握としては「事態実現の前景化」である。

なお、シテアル構文については、一見すると対象が主語であり、動作主が明示できないので、自動詞文に近いように見えるが、「ゴミ箱を部屋の隅に置いてあります」のように対象が対格をとって目的語になることもあること、常に不特定の動作主を含意しつつも、構造上削除されることから、不定人称文の一種とここでは位置付けておく。

表 1 で示した各言語の構文の分布状況について、各言語において好まれると思われる数値の最小値（日本語は受動文、韓国語は自動詞、エストニア語は不定人称文、ロシア語は受動文と自動詞の使用数）を「1」として、その対比で示すと表 8 のようになる。

表 8. 人為的事態の結果を表す場面における構文の分布比

構文	受動文	不定人称文	自動詞	他動詞
日本語	1	1.4	4	0
韓国語	1.4	0	1	0.5
エストニア語	0	1	1.3	0
ロシア語	1	0.1	1	0.3

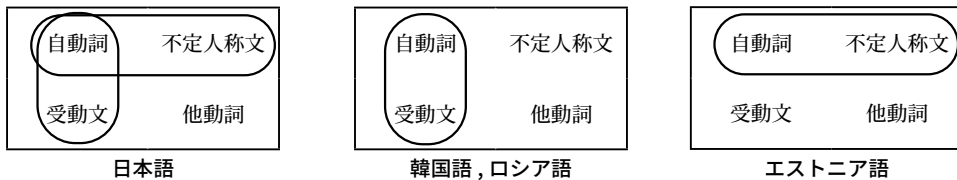


図 2. 人為的事態の結果を表す場面において好まれる構文タイプ

各言語の状況を図示すると図 2 となり、日本語は自動詞文の使用が好まれるが、エストニア語は不定人称文、ロシア語や韓国語は受動文の使用が自然であることがわかる。ロシア語や韓国語では能動文の使用も見られた。つまり、いずれの言語も人為的事態の結果を「自然発生的」に捉えるが、日本語はその傾向が顕著であることを示している。さらに日本語は、「事態実現の前景化」あるいは「対象の話題化」として捉えることもあるが、エストニア語は「事態実現の前景化」したものとして把握し、ロシア語や韓国語は「対象の話題化」したものとして把握するということが分かった。

「動作主の非焦点化」機能を表す構文を言語の主観性の一指標として考えた場合、その使用傾向に基づいて判断すると、日本語は本研究の対象となった言語に比べて、「自然発生的」な事態把握をする傾向にあり、主観性が高い言語であると思われる。

8. 結

本研究では、話し手にとって動作主が不明か、あるいは大事ではない人為的事態の結果を表す場合、日本語、ロシア語、韓国語、エストニア語でどのように表現するかを多言語パラレルコーパスから収集したデータを用いて分析した。その結果以下の点が明らかになった。

- (I) どの言語も自動詞文を使用するが、日本語は特に多い。エストニア語は不定人称文、ロシア語や韓国語は受動文の使用も自然である。
- (II) 自動詞文、受動文、不定人称文、シテアル構文の構文的特徴は事態把握と関連しており、対象が主語であるか目的語であるか、動作主が明示可能か否かで特徴づけられる。

以上の分析により、日本語が主観性の高い傾向があることがあらためて確認できた。この結果は、「言語の自然さ」、「～語らしさ」が認知類型の違いで説明できる可能性を示唆するものである。

本研究で資料とした多言語パラレルコーパスは1つの作品だけであり、これだけでそれぞれの言語を特徴づけるには限界がある。また、日本語が原作である点で方向としては1方向であり、対訳コーパスそのものにも日本語らしさの影響が残ることは否定できない。今後、日本語以外の言語が原作のものや話し言葉中心のコーパスなど、様々なジャンル・内容のものも資料とし、詳細に分析していく必要がある。

謝辞

本研究は、言語学会第21回国際年次大会(JSL2019)(2019年7月7日於東北大学)において発表した内容を加筆・修正したものです。貴重なご教示をいただいた方々に心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は科研費(#20K00595)によります。

▶ 註

[1] 本項で用いている具体的な略号は以下に示すとおりである。グロスでは形態素境界はハイフン「-」で、同一形態素内に複数の文法要素が含まれる場合にはピリオド「.」で示す。なお、下では、日本のロシア語学界で広く受け入れられている術語も併せて示してある：

1: first person (1 人称), 2: second person (2 人称), 3: third person (3 人称), ACC: accusative (対格), ADE: adessive (接格), ADV: adverbial suffix (副詞形語尾), AP: adverbial present active participle (副詞的能動現在分詞, 不完了体副動詞), BE: copula (コピュラ動詞), DECL: declarative suffix (叙述形語尾), F: feminine (女性), FUT: future tense (未来時制), GEN: genitive (属格, 生格), ILL: illative (入格), INDF: indefinite person (不定人称形), INE: inessive (内格), INF: infinitive (不定形), INS: instrumental (具格, 造格), INTER: interrogative particle (疑問小詞), IPFV: imperfective (未完結相, 不完了体), LOC: locative (所格, 前置格), M: masculine (男性), N: neuter (中性), NEG: negative (否定), NOM: nominative (主格), PAP: past active participle (能動過去分詞, 能動形動詞過去), PAST: past tense (過去時制), PFV: perfective (完結相, 完了体), PL: plural (複数), POL: polite speech level suffix (丁寧形語尾), PPP: past passive participle (受動過去分詞, 被動形動詞過去), PRS: prospective adnominal suffix (未来連体形語尾), PTV: partitive (分格), REL: relative (関係詞), RFL: reflexive suffix (再帰接尾辞), RT: Retrospective adnominal suffix (過去連体形語尾), SG: singular (単数), TOP: topic (主題), TRANS: transitive (変格)

その他の文法要素の意味に関しては日本語で表記した。

[2] エストニア語は SVO が基本語順の言語であるが自由度は高く、名詞句「suur hoone (大きい建物)」や

後置詞句「hoone ette (建物の前へ)」「suure hoone ette (大きい建物の前へ)」では主要部である名詞や後置詞がその補部に後続するのが普通であり、また、文法関係も語順ではなく、名詞に後接される格接尾辞によって表現される。したがって基本的に主要部が補部に後続する特徴が多く見られ、日本語や韓国語に近い主要部後置型言語と考える。

- [3] 接辞形は固有語の形容詞と動詞の語幹に付き、「どの用言に付くのか、-i/hi/li/ki- のうちどの形が付くのかはすべて語彙的に決まっている」(円山 2015: 111)。また、「自動詞化・他動詞化・受動化・使役化という複数の機能」を持ち、動詞の形態だけでは「どれに該当するのか判別でき」ない(円山 2015: 111)。本稿で取り扱う接辞形のデータは、個々の構文や文の意味、文脈から受動文と判断した。

- [4] 例文 (8) については引用文献にあったものをそのまま掲載しているが、何人かの韓国語母語話者から不自然または間違った表現という指摘を受けた。

- [5] 副島 (2018b: 73) の表 2 ではシテアルが 47, 自動詞が 154 となっており、本研究の数値と異なる。これは、本研究の分析の過程において、表現している状態が「意図的な行為」の結果かどうか、判断がゆれる例がいくつかあることが判明したからである。本研究においてはそれらのデータをすべて研究対象より取り除いたうえで改めてデータを分析した。そのため、表 2 も含めて以降のデータは一部分析結果が副島 (2018b) から修正されている。

▶参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学一言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店。
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社
- 池上嘉彦 (2003) 「言語における主観性と主観性の指標 (1)」山梨正明 (編) 『認知言語学論考』3: 1-49. ひつじ書房。
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における主観性と主観性の指標 (2)」山梨正明 (編) 『認知言語学論考』4: 1-60. ひつじ書房。
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」『人口知能学会誌』26:(4): 317-322.
- 池上嘉彦・守屋三千代 (編著) (2009) 『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』ひつじ書房。
- 禹吳穎 (2015) 「東アジア諸語の発想と表現: 「スル」的言語と「ナル」的言語をめぐって」『人文』13: 57-79. 学習院大学人文科学研究所。
- 生越直樹 (2008) 「現代朝鮮語における様々な自動・受動表現」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一 (編) 『ヴォイスの対照研究—東アジア諸語からの視点』155-185, くろしお出版。
- 奥川育子 (2007) 「語りの談話における視点と事態把握」『筑波応用言語学研究』14: 31-43.
- 金慶珠 (2001) 「談話構成における母語話者と学習者の視点—日韓両言語における主語と動詞の用い方を中心に」『日本語教育』109: 60-69.
- 古賀悠一郎 (2018) 『現代日本語の視点の研究—体系化と精緻化』ひつじ書房。
- 佐藤昭裕 (1974) 「現代ロシア語における不定人称文について」『ロシア語ロシア文学研究』6: 24-35.

- 志波彩子 (2006) 「2 つの受身—被動者主役化と脱他動化—」『日本語文法』4 (2): 196–212.
- 城田俊 (2003) 『現代ロシア語文法 中・上級編』東洋書店.
- 杉村泰 (2013) 「対照研究から見た日本語教育文法—自動詞・他動詞・受身の選択—」『日本語学』32 (7): 40–48, 明治書院.
- 千英子・柏原卓 (2006) 「現代日本語の文学作品における受身文の研究—韓国語との対応関係分析を中心として—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』56: 129–136.
- 徐珉廷 (2013) 「日韓母語話者と韓国人日本語学習者の事態把握—シナリオ作成法調査の結果から—」『学苑』871: 51–65. 昭和女子大学.
- 副島健作 (2007) 『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房.
- 副島健作 (2018a) 「人為的事態の結果の『好まれる言い回し』—日本語と韓国語の自動詞表現と受動文—」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』4: 177–190.
- 副島健作 (2018b) 「日本語とロシア語と韓国語の『好まれる言い回し』—人為的事態の結果状態を示す表現を比較して—」『国際文化研究科論集』26: 67–79.
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85: 25–37.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学—主観性と文法構造・構文」中村芳久 (編)『認知文法論 II』3–51. 大修館書店.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明 (編)『「内」と「外」の言語学』353–393. 開拓社.
- 中村芳久 (2016) 「Langacker の視点構図と (間) 主観性」中村芳久・上原聡 (編)『ラネカーの (間) 主観性とその展開』1–51. 開拓社.
- 林田理恵 (2001) 「ロシア語受動文と不定人称文」『ロシア・東欧研究』5: 71–117.
- 林田理恵 (2013) 「ロシア語の受け身が描く世界—再帰動詞による受動態とは—」『言語文化研究』39: 75–93.
- 原沢伊都夫 (2005) 「テアルの意味分析—意図性の観点から—」『日本語文法』5 (1): 20–38.
- 許明子 (1999) 「日本語と韓国語の受身文の実証的対照研究—両国のテレビドラマと新聞コラムにおける受身文の使用率の分析を通して—」『世界の日本語教育』9: 115–131.
- 許明子 (2004) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房.
- 堀江薫・P. パルテジ (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』研究社.
- 本田啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991) 「受動表現と主観性」仁田義雄 (編)『日本語のヴォイスと多動性』69–76. くろしお出版
- 松村一登 (1999) 「エストニア語文法」<http://sipsik.world.coocan.jp/download/opik_pdf/Opik99_2005.pdf> 2021 年 3 月 18 日アクセス.
- 円山拓子 (2015) 「韓国語の語彙的自他交替—接辞-*i*/*hi*/*li*/*ki*- による派生の双方向性—」パルデシ P. ほか (編)『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの—』109–125. くろしお出版

- 円山拓子 (2016) 『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』 ひつじ書房 .
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』 くろしお出版 .
- 山田勇 (2003) 「スラブ語の不定人称文と無人称文について」 『香川大学経済論叢』 76 (3): 5-12.
- Brevins J. P. (2001) "Passives and impersonals." Retrieved March 18, 2021, from <http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.28.4044&rep=rep1&type=pdf>
- Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Croft, W. (2001) *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Dahl, Ö. (1985) *Tense and aspect systems*. New York: Basil Blackwell Ltd.
- Givón, T. (1981) "Typology and functional domains." *Studies in Language* 5 (2): 163-193.
- Hopper, P.J. and S.A. Thompson. (1980) "Transitivity in grammar and discourse." *Language*, 56 (2): 251-299.
- Ikegami, Y. (2005) "Indices of a 'subjectivity-prominent' language: Between cognitive linguistics and linguistic typology," *Annual Review of Cognitive Linguistics* 3: 132-164.
- Nedjalkov, V.P. (ed.) (1988) *Typology of resultative constructions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Nedjalkov, V.P. and S. Je. Jaxontov (1988) "The typology of resultative constructions." In: Nedjalkov, V.P. (ed.) (1988): 3-62.
- Reeli T.-L. (2007) "Voice and modal verbs in Estonian." *Linguistica Uralica*, 43 (3): 173-186.
- Shibatani, M. (1985) "The passive and related constructions: A prototype analysis." *Language* 61: 821-848.
- Soejima, K. (2014) "On expressions of agent de-topicalized intentional events: A contrastive study between Japanese and Russian." *Journal of Japanese Linguistics*, 30: 115-136.
- Tuldava, J. (1994) *Estonian textbook, volume 159 of Indiana University Uralic and Altaic Series*. Bloomington: Indiana University.
- Uehara, S. (2006) "Toward a typology of linguistic subjectivity: a cognitive and cross-linguistic approach to grammaticalized deixis." In: Angeliki Athanasiadou, Contas Canakis, and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: various paths to subjectivity*, 75-117. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Vinogradov, V. V. (1960) E. S. Istrina and S. G. Darchudarov Ed.,. *Grammatika russkogo jazyka: T. 2, č 2: Sintaksis* [Russian grammar, vol. 2, no.2, Syntax]. Russian Language Institute of the USSR Academy of Sciences.
- Malchukov, A. & A. Siewierska. (2011) *Impersonal constructions: A cross-linguistic perspective*. Amsterdam: Benjamins.
- Malchukov, A. & A. Ogawa. (2011) "Towards a typology of impersonal constructions: A semantic map approach." In: Malchukov & Siewierska (eds.): 19-56.

Maroevich, R. (1993) “Neopredelenno–ličnye predloženiya v russkim jazyke i ix serbskie ekvivalenty (O sootnošenii sopostavitel’noj lingvistiki i teorni perevoda)” [Indefinite–personal sentences in Russian and Serbian equivalents (On the relation of comparative linguistics and translation theory)]. *Voprosy Jazykoznanija* [Questions of linguistics], no. 2: 96–106. Russian Language Institute of the Russian Academy of sciences

▶パラレルコーパス構築のための資源

村上春樹 (1987) 『ノルウェイの森』 上・下 . 講談社 (講談社文庫 . 2004)

Murakami, H. (2006) *Norra Mets* [Norwegian Wood]. (K. Lindström, Trans.). Tallinn: Varrak.: reed., Tallinn: Varrak 2015 (Original work published 1987) エストニア語訳

Murakami, H. (2007) *Norvežskij Les* [Norwegian Wood]. (A. Ljan, Trans.). (Original work published 1987) , Retrieved June 17, 2017, from http://lib.ru/INPROZ/MURAKAMI/n_wood.txt ロシア語訳

Murakami, H. (2013) *Noruweiui Swuph* [Norwegian Wood]. (E. Yang, Trans.). Seoul: Minumsa. (Original work published 1987) 韓国語訳

On the Expression of Results by employing Passive, Intransitive verbs and Related Constructions in Japanese, Korean, Russian and Estonian

KENSAKU SOEJIMA, Hosei University

Abstract

In this study, we used a multilingual parallel corpus of Japanese, Estonian, Korean, and Russian to examine the tendency to use expressions describing the results of intentional events cross-linguistically, taking into account the relationships among constructions. The results show that the structural features of these languages are influenced by the subjectivity and objectivity of the construal of the situation.

The two main suggestions are as follows. (I) All of these languages use intransitive sentences, but Japanese uses them particularly frequently. (II) The syntactic features of intransitive sentences, passive sentences, indefinite–personal sentences and the *shite–aru* constructions are related to the construal of a situation, and are characterized by whether the patient is the subject or the object, and whether the agent is explicit or not. These results suggest that Japanese is more subjective–construal oriented than the other three languages.